

般若寺遺跡（西屋敷地内）・竜王山古墳

般若寺遺跡（穴塚小学校地内）

発掘調査概報

1987年

土浦市教育委員会

正 誤 表

頁	行	誤	正
例 言	11	鈴木賢一	鈴木健一
例 言	13	スクリートーン	スクリーントーン
15	7	1・2は…、3は	2・3は…、4は
奥 付	1	般若寺遠跡跡	般若寺遠跡

序

このたび、般若寺遺跡（西屋敷地内）・竜王山古墳及び般若寺遺跡（宍塚小学校地内）の学術調査を行いましたので、その概要を集録し報告書として発刊することとなりました。

竜王山釈迦院般若寺は、寺伝によると天曆元年（947）平将門の娘安寿姫により創建され、現在地には平安末期に移されたと言われております。今も境内地には、建治元年（1275）の銘をもつ国指定重要文化財の銅鐘をはじめ多くの貴重な文化的遺産が残されており、その価値については市民はもとより広く衆人の知るところであります。

調査の結果、中世の古瓦や土器が多量に出土し、当寺創建の古さが立証されました。さらに、般若寺創建以前の古墳や遺跡も発見され、当地には既に古墳時代のはじめごろから人間の足跡が残されていることも明らかになりました。

以上のような新発見も、当地の長い歴史からみればほんのわずかにすぎないものであり、今後も継続的な調査と文化財保護に努力すべき必要性を感じております。そのためにも、市民の皆様が文化財保護行政に対する深いご理解が必要であり、なお一層のご協力を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが、調査及び報告書発刊に際してご協力いただきました地元有志をはじめ多くの皆様に心から感謝申し上げます。

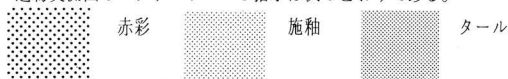
土浦市教育委員会
教育長 日下部 晁

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と歴史的環境	1
III 調査の経過	4
IV 調査の概要	5
1) 般若寺遺跡（西屋敷地内）・竜王山古墳	5
a) 調査区の設定	5
b) 遺構・遺物	5
c) まとめ	9
2) 般若寺遺跡（宍塚小学校地内）	10
a) 調査区の設定	10
b) 遺構・遺物	10
c) まとめ	16
図 版	24

例 言

1. 本書は、土浦市宍塚町1,459、1,462番地にある般若寺遺跡・竜王山古墳の学術研究調査及び宍塚町1,478番地の宍塚小学校特別教室棟増築に伴う般若寺遺跡の事前発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は土浦市遺跡調査会が実施した。
3. 編集は塩谷修が行い、実測トレースは石川功、斉田克史、武蔵美和、井坂洋子、塩谷が、写真撮影は石川、塩谷が行った。
4. 執筆は、岩沢茂、石川、斉田、井坂、塩谷が行った。
5. 調査及び報告書作成にあたり下記の方々にご指導、ご協力をいただいた。
茨城県教育委員会、市文化財保護審議会、市文化財愛護の会、黒沢彰哉、斉藤信、佐野泰子、須田勉、鈴木賢一、堀越徹、松尾昌彦
(五十音順、敬称略)
6. 遺物実測図のスクリーン・トーンは次のとおりである。



I 調査に至る経緯

1) 般若寺遺跡（西屋敷地内）・竜王山古墳

竜王山釈迦院般若寺は、寺伝によると天曆元年（947）平将門の娘安寿姫により、尼寺として突塚の台地に創建されたが、のち平安末期に現在地に移されたといわれている。旧境内地の鹿島神社附近から多量の布目瓦が出土していることから、その創建の古さが知られている。

また、寺の山号でもある竜王山と呼ばれる古墳が現在の本堂西側に位置していたが、農業の耕作のためほとんどが削平され、規模を推測することは不可能な状態であった。

今回の発掘調査は、上記の歴史を学術的に究明することを目的として、「般若寺遺跡」及び「竜王山古墳」の調査を実施したものである。

発掘に当っては、土浦市遺跡調査会を編成し、今後の調査を考えて、国家座標に基づく杭打ちをおこない、7月23日から発掘調査を開始した。

2) 般若寺遺跡（突塚小学校地内）

この地はもと般若寺の境内地であったが、明治41年9月から、突塚尋常小学校用地として利用され、その後、徐々に拡張され現在の突塚小学校敷地となっている。

今回の開発行為区域は、現在設置されている老朽化した木造校舎を解体し、鉄筋コンクリート造2階建（特別教室）607㎡を新築するものである。

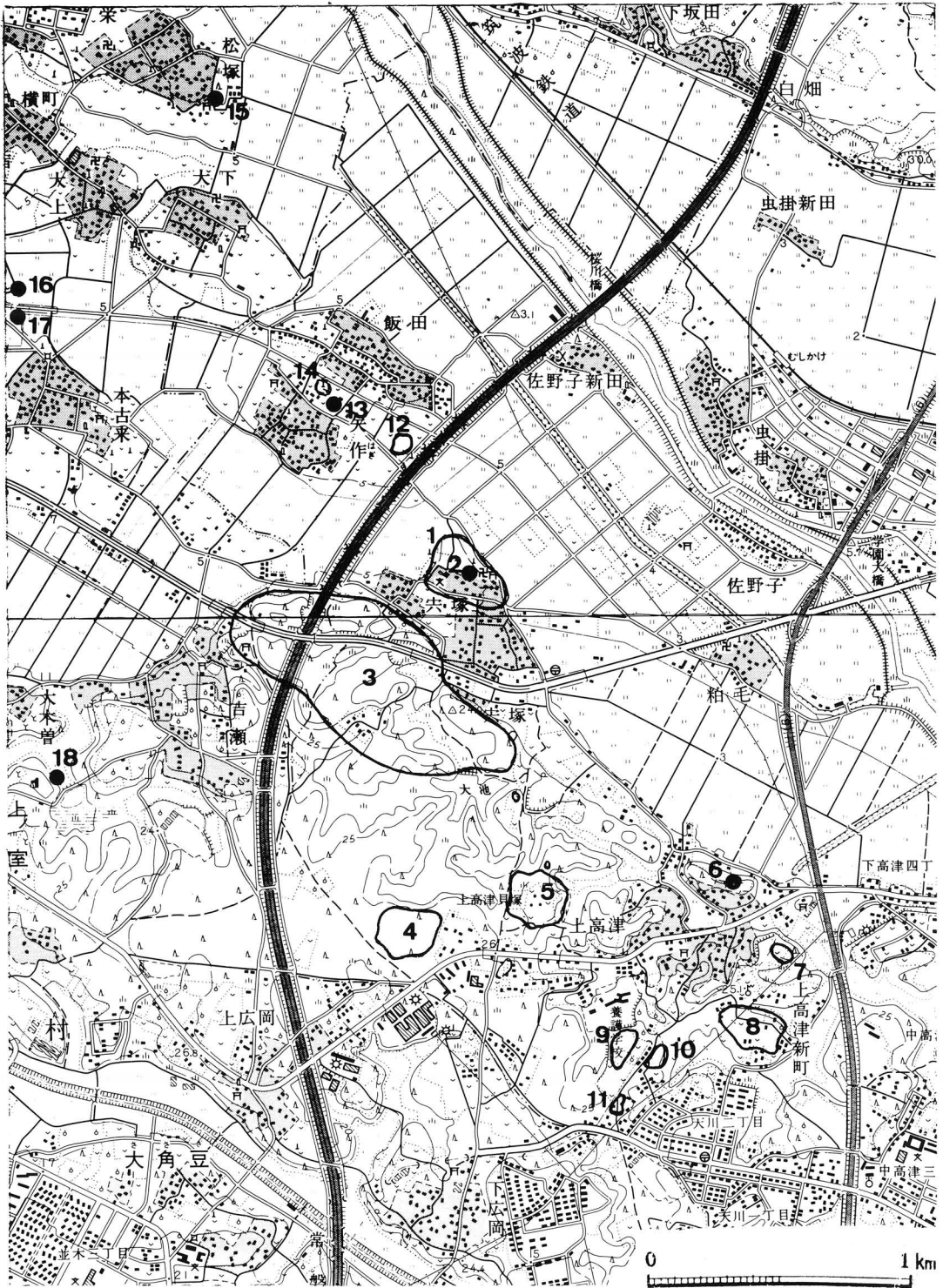
これについて、市建築課、市教育委員会学務課・社会教育課において、保存策について協議を進めてきたが、この区域をはずすことができないため、発掘調査を実施し、記録として保存することを確認した。

これを進めるにあたり、建設予定地に幅2m長さ30mのトレンチを3本設定し、8月21日から23日の3日間で試掘調査を実施した。 (岩沢)

II 遺跡の立地と歴史的環境（第1・2図参照）

般若寺遺跡は、土浦市の北西に位置する土浦市突塚町に所在し、地形的には桜川下流右岸の丘陵地帯の北裾の、桜川の自然堤防と見られる微高地上に存在している。周囲は水田に囲まれ、南側の丘陵地は溺れ谷のため細かく入り組んだ非常に複雑な地形を呈しており、その丘陵上には突塚古墳群をはじめ数多くの遺跡が存在している。

先土器時代の遺物としては、突塚古墳群第1号墳発掘調査時に、墳丘下よりナイフ形石器が一点検出されている。



第1図 遺跡分布図

(国土地理院発行 1/25,000 に加筆)

第1表 般若寺遺跡とその周辺遺跡

No.	名 称	所 在 地	立 地	時 代
1	般若寺遺跡	土浦市宍塚町西屋敷 他	自然堤防上	古墳・中世
2	竜王山古墳	〃 〃 〃	〃	古墳
3	宍塚古墳群	〃 〃 大日山 他	筑波・稲敷台地	〃
4	栗崎遺跡	〃 〃 栗崎	〃	縄文・古墳
5	上高津貝塚	〃 上高津町貝塚	〃	縄文
6	幕下女騎古墳	〃 〃 幕下女騎	〃	古墳
7	寄居遺跡	〃 上高津町寄居	〃	古墳・平安
8	新町遺跡	〃 上高津町新町	〃	平安
9	宮脇B遺跡	〃 上高津町宮脇	〃	縄文・平安
10	宮脇A遺跡	〃 〃 〃	〃	平安
11	宮脇庚申塚	〃 〃 〃	〃	江戸(大正・昭和)
12	竹岡遺跡	〃 飯田町竹岡	自然堤防上	縄文・平安
13	矢作稲荷神社古墳	〃 矢作町稲荷	〃	古墳
14	ドンドン塚古墳跡	〃 〃 御街道	〃	〃
15	松塚古墳群	新治郡桜村松塚	〃	〃
16	古来館跡	〃 〃 古来館山	〃	歴史
17	古来遺跡	〃 〃 〃 寺山	〃	弥生・古墳
18	大日塚古墳	〃 〃 上ノ室	筑波・稲敷台地	古墳

縄文時代の遺跡としては、桜川流域において最も大きな規模を持つ上高津貝塚が古くから知られており、そこから出土した土器片は、中・後・晩期のものが中心であるが、前期の土器片も発見されている。また貝製の腕輪や猪牙製の装飾品、土偶等が発見されている。この他にも栗崎遺跡では、中期の土器片が多数出土している。

弥生時代の遺跡としては、前述の宍塚古墳群第1号墳の墳丘下から、弥生時代の住居跡10軒が確認されている。

古墳時代になると、丘陵上に古墳が数基ずつ小グループに分れて存在するようになり、4基の前方後円墳と18基の円墳より、宍塚古墳群が形成されるようになる。1968年には、その内の1号墳等3基が国学院大学の故大場磐雄博士によって発掘調査が行なわれている。1号墳は大日山古

墳と呼ばれる前方後円墳で、箱式石棺と推定される第1主体部から金銅製耳環が1点検出され、また封土中からは、古墳時代後期のものと考えられる土師器と須恵器大甕の破片が検出されている。5号墳からは一重に周らせた円筒埴輪が、6号墳からは円筒埴輪、形象埴輪が検出されている。また1979年には、この古墳群の東端にある根本古墳（14号墳）の緊急発掘調査が筑波大学によって行なわれている。工事による削平のために、主体部及び墳形は明らかにならなかったが、周溝内からは円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪が検出され、少数ではあるが土師器片も検出されている。また栗崎遺跡からは、古墳時代中期の土師器の他、滑石製模造品が多数表採されており、祭祀遺跡の存在が想定されており、その一部は1986年茨城大学によって発掘調査が行なわれている。ところで、これら台地上にある遺跡とは対照的に、今回調査を行なった竜王山古墳は微高地に位置している古墳であるが、付近において同様の立地を示しているものに矢作稲荷神社古墳等がある。

歴史時代のものとしては、多くの遺産を今日に残す般若寺がある。その創建年代や当時の寺の規模は明らかではないが、この寺の周辺に多量の布目瓦が散布しており、寺に残された梵鐘にも「建治元年」（1275年）の銘があることから、寺の創建もそれ以前に遡ることが予想されている。（井坂）

参考文献

- ・『常陸穴塚』 国学院大学穴塚調査団 1971
- ・『土浦市史』 土浦市史刊行会 1975
- ・『筑波地域古代史の研究』 筑波大学 1981
- ・『土浦の遺跡』 土浦市教育委員会 1984

III 調査の経過

- | 1) 般若寺遺跡（西屋敷地内）・竜王山古墳 | 2) 般若寺遺跡（穴塚小学校地内） |
|---|---|
| 7月21日 現般若寺の裏手に4本のトレンチ（第1～4トレンチ）を設定する。 | 8月21日 試掘調査開始。調査区（10.5m×30m）に3本のトレンチを設定。 |
| 23日 調査開始。第1トレンチ表土層より多量の瓦が出土。各トレンチは湧水が激しく、作業ははかどらない。 | 22日 古墳の周溝と思われる溝を確認 |
| 26日 第3トレンチより素焼きの壺形土器がほぼ1個体分出土。第4トレンチの発掘調査開始。 | 23日 試掘調査終了。引き続き本調査に入り、全面発掘を行うこととする。 |
| 28日 第5トレンチを設定。 | 26日 調査区西側より、樋状の遺構を（溝2）検出。 |
| 31日 第5トレンチにおいて、竜王山古墳のものと思われる周溝を確認。 | 27日 周溝より埴輪が出土。 |
| 8月5日 第6～8トレンチを設定。 | 29日 周溝より土師器が出土。 |
| 8日 第9トレンチを設定。 | 30日 調査区西側に検出された3条の溝址のプランがほぼ明らかとなる。 |
| 9日 第9トレンチにおいて周溝のコーナーを確認。 | 9月19日 完掘 |
| 21日 作業終了。各トレンチの写真撮影の後、埋め戻しを行なう。 | 22日 写真撮影。作業終了。（齊田） |

IV 調査の概要

1) 般若寺遺跡（西屋敷地内）・竜王山古墳（第2、3図参照）

a) 調査区の設定

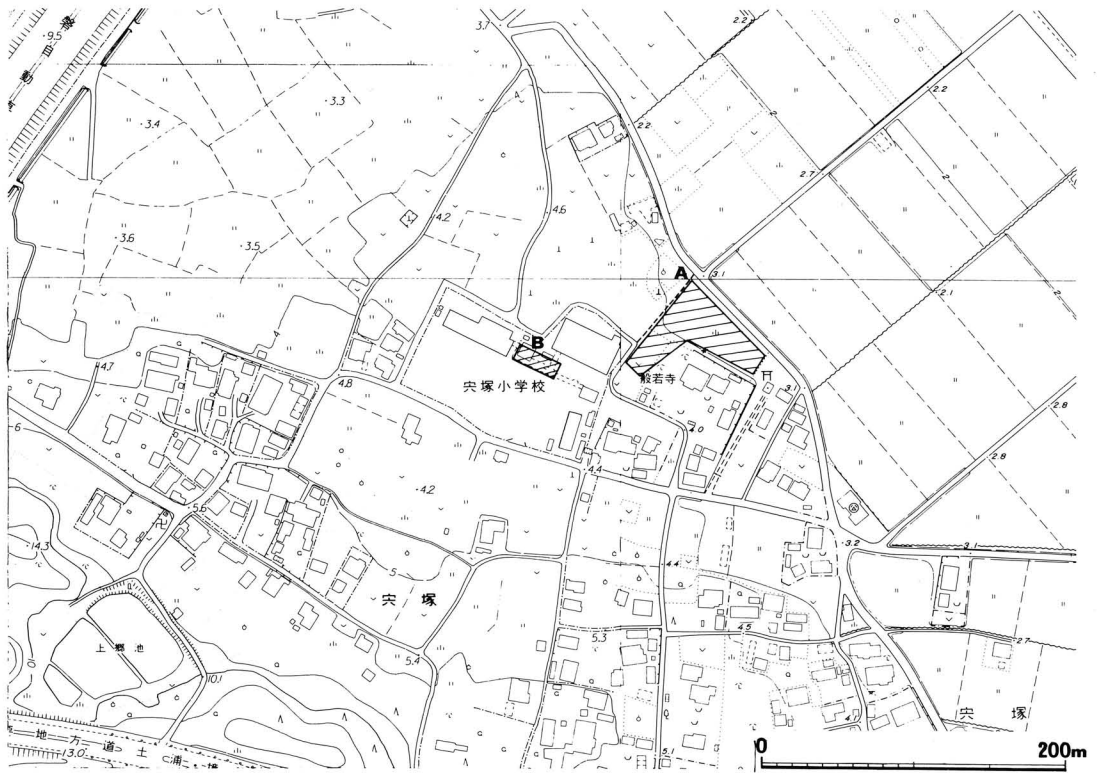
今回般若寺遺跡を発掘するにあたって、その目的として、1) 現在でも不明な点の多い旧般若寺関連遺構の存在を確認し、本寺の創建年代や規模を明らかにする、2) 近年まで残存していた竜王山古墳の墳形、規模や築造年代を明らかにするの2点が考えられた。このため、調査方法は広範囲を調査できるトレンチ法によるものとし、以前瓦の表採された神社横に1本と、現般若寺の北及び西側の畑地に平面直角座標系第Ⅸ系（座標基点＝北緯36° 0′ 0″、東経139° 50′ 0″）に合わせた平面直角座標（このP1を通るX軸が+9.500、Y軸が+30.040である。）をもとに、X軸に平行に1本、Y軸に平行して4本を設定した。その後調査の進展に伴ない、主に竜王山古墳周溝確認のため、トラバースを延長して、第6～9トレンチの4本を順次設定した。

b) 遺構・遺物

古墳（周溝）

前述の各トレンチの内、西側の第5～7、第9トレンチにおいて、古墳の周溝と思われる溝状の遺構を検出した。この溝は第9トレンチにおいて若干開き気味のコーナーを有するもので、以上の4本のトレンチにおいて溝の内縁部を確認したものである。溝の規模はどのトレンチも外縁部を検出していないため明らかではないが、第5、第7トレンチをもとに類推すると、確認面における上部幅約7m以上、底面幅6m以上、深さ40～60cmが考えられるが、これらは攪乱によって上部がとばされている可能性が大きいいため、築造時は現在以上の規模であったものと想像される。溝の形状は、後の時代の遺構との切り合いや、攪乱のために大きく旧状を損っているが、底面は概してフラットなもので、掘り込みの角度は第5トレンチで約60度、第6、第7トレンチで約30度、第9トレンチではもっと緩いものである。また溝の埋没土は自然堆積を示しており、しまりの弱い黒褐色土を基調に3～5層に分れるものである。以上のことから、この溝は形態上古墳の周溝と推定することができ、その場合の墳形は、第9トレンチのコーナーから想定して方形になることが考えられる。ただし規模については、確認できた東西辺24メートル、南北辺7メートル以外については明らかではない。

周溝内からは、第5トレンチを中心に外面に赤色塗彩の施された底部穿孔の壺形土器（第5図-1）が、第7トレンチからは埴輪片が出土した。まず底部穿孔の壺形土器であるが、これは溝の内側寄りの黒褐色土中に、流れ込みと思われる状態で分散して出土したものである。調整は外面の胴部下半がタテハケ、接合部以上がヨコハケで、内面は下部がヨコハケ、上部がナデである。なお底部への穿孔は焼成前に施されたものである。



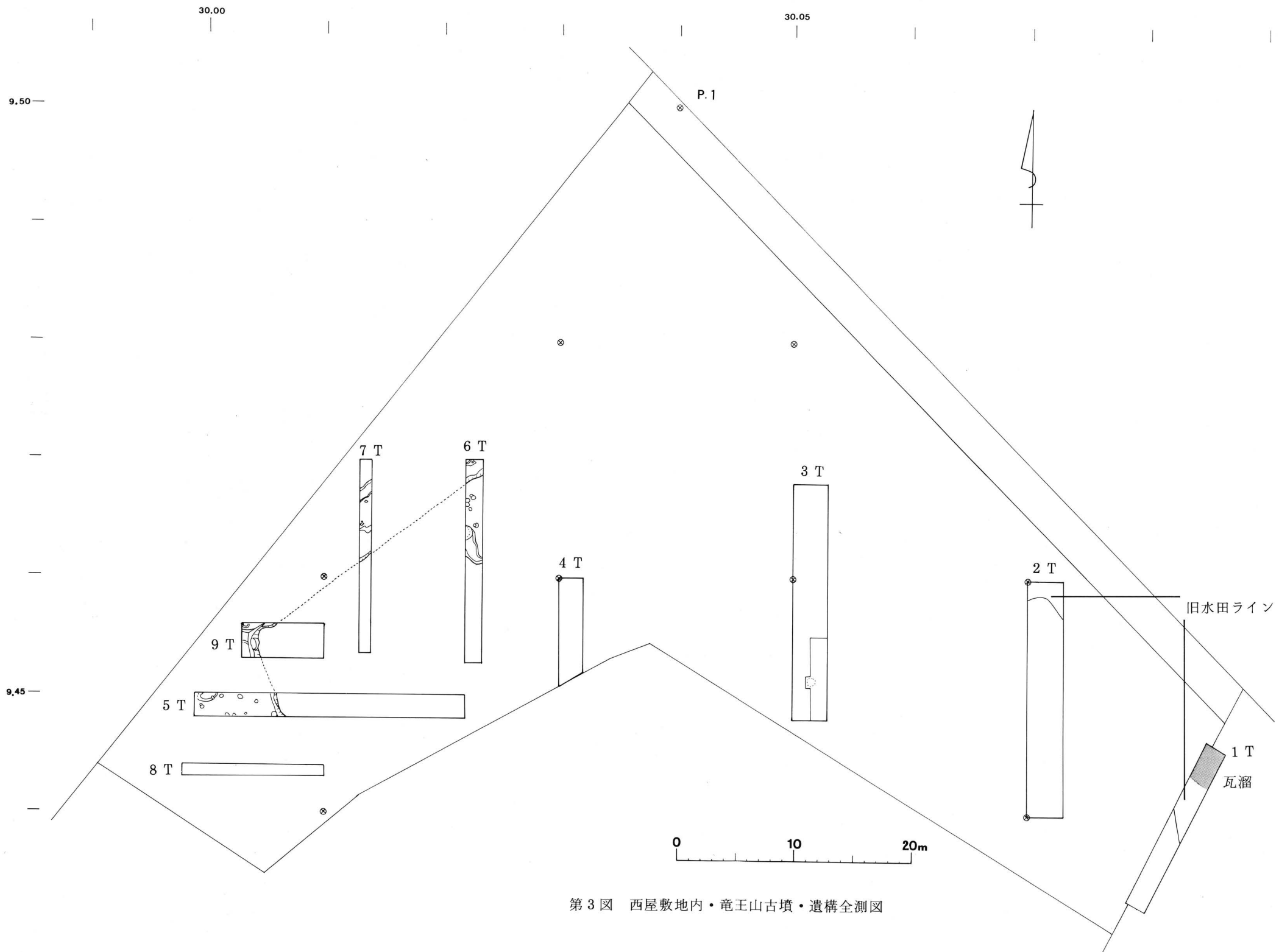
第2図 調査区位置図 A：西屋敷地内・竜王山古墳、B：突塚小学校地内

次に埴輪であるが、これらは攪乱層内の出土である。口縁部（第5図-3）はゆるく外反するもので、端部には狭い平坦面をつくりだしている。調整は外面タテハケ、内面ヨコハケ、口縁端部ヨコナデであるが、外面のタテハケは、かなり浅いものであったのであろうか、磨滅して判然としなくなっている。底部（第5図-2）は、ほぼ垂直に立ち上がり、あまり底面を肥厚させないものである。調整は外面が下から上へのタテハケ、内面が輪積み痕を消しただけの粗いユビナデである。また、底部には藁茎状の圧痕を見ることができる。（石川）

土 塚

第3トレンチと第6トレンチより各1基の土塚を検出した。第3トレンチのもの（1号土塚）は、上部攪乱のため基底部のみの確認に止まり、平面プラン・規模等を詳しく知ることはできなかった。ここからは素焼きの壺形土器（第6図-4）1個体分が出土した。この壺は、残存高34.8cm、最大径30.8cmを計り、外面には粗いハケ調整の後に、肩部から胴部にかけて螺旋状に沈線が施されている。口縁部と底部は、焼成後に打ち欠かれており、蔵骨器として使われていた可能性が考えられる。この壺は、その器形・沈線から、三筋壺の影響下にあるものと思われる。

次に第6トレンチのもの（2号土塚）であるが、これは西半分が調査区外のため、平面プラン等は明らかではないが、直径1, 2m程度の円形を呈すると思われる。また深さは、湧水が激し



第3図 西屋敷地内・竜王山古墳・遺構全測図

く完掘できなかったため確認されていない。ここからは、かわらけ（第6図2，3）等が出土している。

ピット群

第5、6トレンチを中心に、多くのピットが確認され、その一部には柱痕も検出された。これらは上面の攪乱が激しく、掘り込み面、配列等は明らかにし得なかったが、主に般若寺に関連する遺構と思われる。

溝状遺構

第6トレンチより溝状の遺構を検出した。その遺構は南東から北西に延びており、南東側は調査区外へと続き、北西側は2号土壇に切られているものである。平面形態は南東から北西に向けて幅が広がって行く様相を呈し、最も狭い部分で約48cm、最も広い部分で約165cmを測る。上面は攪乱を受けているが残存部の深さは約20cmである。ここからは、かわらけ（第6図-4）等が出土している。

その他（遺構外）

第1トレンチを中心に大量の瓦片が出土している。これらは、付近に散布していたものを近年になって一ヶ所にまとめたものらしく、最近の陶器（瀬戸物）やコンクリート瓦等も混在しているが、旧般若寺のものと思われる古瓦も含まれている。

第6図-9・10は軒丸瓦である。外区には珠文を配し、内区には三ッ巴を配している。この巴は、先端が細く伸び、形態的に古い様相を見せる。双方とも外区の大部分を欠くが9は直径約12cm、10は直径約16cm以上になるとと思われる。

第6図-7・8は軒平瓦である。7は四ッ菱を基本とし、その凸型と凹型とを交互に配している。8は瓦頭面に珠文のみを配している。

第6図-11・12（11は表採資料）は平瓦である。凸字・裏文字・縦書きで「寺五重塔瓦也」の型押しのある文字がある。他の採集資料の中に「寺」の字の上に型押しした際の型枠の跡が見られるものがあることから、この文字から始まっているものと思われる。

なおこのほかにも布目瓦や縄叩き目を持つ瓦があり、陶器、かわらけ（第6図-1）、火舎（第6図-5・6）等も出土している。

（斉田）

c) まとめ

今回の調査によって、旧般若寺及び竜王山古墳について明らかになったことを整理してみたい。

まず旧般若寺であるが、今回の調査によっては確実に寺の遺構と断言できる堂塔等の遺構は確認されなかったが、第3・5・6トレンチにおいて検出されたピット群や土壇等は規模や性格は不明であったが、出土遺物等より中世期の年代が考えられるため、これらは何らかの意味で旧般若寺に関連したものであろうと思われる。また第1トレンチ等より出土した瓦の中には、明らかに古式のものがあり、これらは本寺の創建年代に近い年代が推察される。

次に竜王山古墳であるが、こちらは予想以上に攪乱が激しく、主体部に関しては何も得ることができなかった。これに対し、第5～7・9の各トレンチにおいて古墳の周溝と思われる溝を検出したが、これについては第5トレンチを中心に、五領期に属すると思われる底部穿孔土器が出土しているため、果たしてこの溝が横穴式石室と推定されている竜王山古墳の周溝であると確定し難い面もある。あるいはかなり大型で、比較的新しい時期の方形周溝墓の溝である可能性も残されていると言えよう。しかし、現在のところ一辺24m以上、周溝幅7m以上にも及ぶ大型の周溝墓は霞ヶ浦沿岸地域はもちろん、茨城県下においてもその類例を見ないものであることは確かである。また周溝内出土の2点の埴輪片についても、特徴的には退化様相が看取でき、竜王山古墳の年代に比較的合致することも考えられるが、出土位置が攪乱層中であり、隣接する古墳（宍塚小学校地内）が埴輪を有しているものであるため、そこからの流れ込みの可能性も否定することはできない。要するに、溝の帰属年代はおろか、竜王山古墳に付随するものであるかどうかさえも結論が出せないのが現状である。

以上の様に、この周溝の問題については歯切れの悪いものとなってしまったが、今後の調査の課題としては、今回確認できなかった旧般若寺の堂塔の遺構の検出と、この周溝の規模及び性格の解明、それに近年まで残存していた竜王山古墳との関連性の解明の3点が考えられる。

（石川）

2) 般若寺遺跡（宍塚小学校地内）（第2・4図参照）

a) 調査区の設定

今回の調査範囲は、宍塚小学校の校地北寄り、新校舎建設予定地約315m²（30×10.5m）である。試掘調査ではここに30×2mのトレンチ3本を設定した。（試掘率57.1%）次いで本調査では、調査区全域に2m四方のグリッドを設定し、東西方向に東からA～P、南北方向に北から1～6とし、A-1・A-2グリッドのように呼称することにした。

b) 遺構・遺物

古墳（周溝）

調査区のはば中央を南北に走る溝は、その規模・埴輪が出土することなどから、古墳の周溝であることが明らかとなった。

周溝は、上面が削平を受けているため本来の規模は不明であるが、底面幅約4m、残存部上面幅約4.5m・残存深さ約0.5mを測る。平面形態としては、東側を内面とする緩い弧状を呈するが、墳形を特定するには至らなかった。調査区南寄りを中心に埴輪・土器が多数出土した。

周溝より出土した遺物の内、古墳に直接伴うと思われる遺物は埴輪・土器・滑石製模造品（剣形品）である。いずれも整理中であるが、今回図化し得たものについて述べることにする。

埴輪（第7・8図参照）



第4図 実塚小学校地内調査区・遺構全測図

今回の調査で出土した埴輪は、大部分が円筒もしくは朝顔形埴輪であり、形象埴輪と思われるものはほとんどない。焼成は窖窯によるものと思われ、黒斑を有するものはない。

(円筒埴輪)

完形品は出土していないが、3条目の突帯まで復元できたもの(第8図-9)からすると、底径19cm・高さ33cm以上であることが明らかとなっている。

口縁部：口縁部は、内面調整にヨコハケを用いるもの(第7図-1)と他の部位同様ナナメハケのもの(第7図-2)とに細分できる。口縁端部はヨコナデされるものが多く、このため断面は原則として「コ」の字状を呈する。また、口縁端部外面に一条の沈線をもつもの(第7図-2)が多い。

基底部：基底部には、端部が肥厚するもの(第8図-7)と、ほとんど肥厚せず胴部の厚みのまま底部となるもの(第8図-5・6)の2種がある。前者は5~10cmの高さの粘土帯を用いて基底部を形成するが、後者は基底部からの巻き上げを用いていると思われる。さらに、内面指押さえによる一種の底部調整を行なっているもの(第8図-9)もある。

突帯：突帯は、突出度が高く断面がしっかりとした台形を呈するものが多い。調整には原則としてユビナデが行なわれていると思われるが、一部には板状工具を用いたと思われるもの(第7図-12)がある^(註1)。また、突帯の張り付けに際し胴部に沈線が施される(第7図-5)が、これは突帯の張り付け位置の割り付け線であると同時に、突帯の接着力を強めるためと思われる。

スカン孔：スカン孔は、原則として円形であるが、縦長の楕円形のもの(第8図-9)や、突帯との位置関係から隅丸方形に近くなると思われるもの(第7図-4)もある。孔数は原則として1段に2個と思われ、複数の段に穿孔されているものも確認されている。

調整 外面調整は原則として1次タテハケのみである。原体の工具は10本/2cmのものを用いている。内面調整は、底部から口縁部に至るまでハケのみで調整するものと、下半部にユビナデを用いるもの(第7図-12)の2種類に分けることができる。

胎土：胎土に雲母の細片を多く含むことが特徴としてあげられる。

以上が円筒埴輪の主な特徴であるが、この他に、赤彩の見られるもの(第8図-6)もある。全体に、作りは丁寧であるとの印象を受ける。

(朝顔形埴輪)

朝顔形埴輪の資料は断片的であり、その全体を復元するには至っていない。第7図-10は花状部の擬口縁の部分である。花状部はあまり外反せずに立ち上がり擬口縁を成し、そこから垂直気味に花状部上半部が立ち上がっていく。第7図-9は花状部先端の口縁部である。口縁部は大きく開き、端部は断面円形に調整されている。

土師器(第9図-1~7)

周溝から出土した土師器は、坏形土器・甕形土器の他、底部穿孔壺形土器・異形器台形土器等が見られる。また坏も、赤彩されているものが多い。このうち、底部穿孔の小型壺(第9図-4)は胴下半部を焼成後に大きく打ち欠いたものであり、その割れ口に更に調整を行っている。

これらは古墳に伴なう墓前祭祀の土器と思われるが、出土位置が周溝底面に近いことから、比較的古墳の年代に近いものと思われる。時期的には和泉期（古墳時代中期）の中でも比較的新しい時期の様相を持ったものを多く含んでいる。

滑石製模造品（第9図－8）

所謂“剣形品”と呼ばれるものである。上面の一部と先端をわずかに欠くが、全体に残りは良い。全長3.5cm・最大幅1.2cm・厚さ0.5cmを計る。上部に1個の穿孔が施されている。（斉田）

（註1） 稲村繁氏によると、石岡市愛宕山古墳出土の埴輪の中に突帯調整に「藁状の植物を束ねた工具」を用いたものがあるとのことである。

「茨城県霞ヶ浦北西部における前方後円墳の変遷－埴輪を中心として－」『史学研究集録』第10号

国学院大学日本史学専攻大学院会 1985

溝状遺構

今回の発掘調査中、調査区西側において溝状遺構が3条検出された。位置と名称は、最も西寄りにある短いものが溝1、調査区北側から南側へ蛇行しながら抜ける細いものが溝2、西側から周溝の先まで延びているものが溝3である。

溝1

L-1区からN-2区にかけて走る溝で、南側を溝3によって切られている。溝の流路方向は、現存部では比高差がほとんどないため不明である。溝の規模は上面で約120cm・下面で約40～50cmを測るもので、底面は若干窪んでいるが、ほぼフラットである。遺物は陶磁器、中世土器が出土したが細片が多い。

溝2

J-1区の北側からO-4区の西側にかけて走る溝で、西側とも調査区の外へ延びている。溝の流路方向は溝3を境に逆転しており、北側は北東から南西、南側はその逆で、比高差は北側が約17cm、南側が3cmである。なお、この溝は本来は1本であり、たまたまレベルが逆転してしまったのか、それとも溝3に流れ込む2本の溝であったのかは、合流部を確認できなかったため不明である。溝の規模と形態は、上面で20～30cm・底面で10～20cmで、底面から5～10cm程は垂直に立ち上がり、所謂箱掘状を呈するものである。またこの掘り方内に、内法10cm程度の木樋状のものを埋設していた可能性が高い（図版4参照）。なお、この溝は確認できた範囲では溝3の埋没後に掘られたものである。遺物は極端に少なく瓦片等が若干出土したのみであるが、別にL-1区南側の木樋状遺構の内面と思われる所より、白色の繊維状の物質が検出されたが、詳細は検討中である。

溝3

O-3区の西側からC-2区にかけて走る溝で、西側は調査区の外へ延びている。流路方向は東南から西北、比高差は約20cmである。溝の規模と形態は、東側が、上面約3.3m、下面約2m、西側が上面約5m、下面3.4m、確認面よりの深さ約0.7～1mで、断面「コ」字に近いものであ

るが、L-3区からN-3区にかけては、底面南寄りに大きな窪みが存在する。

遺物は陶磁器・中世土器を中心に隣接する古墳の埴輪や、また南西部の窪みより木材（内1本は杭）が出土した。今回は陶磁器が整理途中のため、中世土器類について紹介する。

第10図-1はJ-4区中層下部より出土した内耳で、口径約38cm・器高約19cmを計るもので、把手貼付部外面に指頭痕を残している。また、内耳の中には今回は図化できなかったが、もっと胴部の張るものや、内面の把手貼付部周辺に刷毛状工具による調整を加えているものも存在する。第10図-2～4はH～K区の溝下層より出土したかわらけで、1・2は所謂中型、3は小型に分類されるものと思われる。なお、極だって大きい型ものは存在しないようである。成形はすべて粘土紐巻き上げ後のロクロ調整と思われ、口縁部にのみヨコナデが施されている。底部はあまり肥厚せず、調整は回転糸切りの無調整であるが、スノコ痕を有するもの（2、他に5・6）も見うけられる。なお、底径/口径は2・3が60%以下、4が約65%である。これらの他には第10図-5の、溝上・中層出土の片口がある。この片口は、かわらけと同じ成形技法によるもので、若干胴部以上を縦長に歪ませたものである。なお、注口部にはタールが付着している。以上をふまえて、いささか乱暴ではあるが遺物の傾向を考えると、溝から出土したかわらけは、回転糸切り底のものが圧倒的に多く、内型成形や手捏ねと思われるものが見られないこと、また内耳については、比較的器高の高いものが多いことなどが見られるが、詳細は整理完了後に考えてみたい。

土壇・ピット

これらの遺構は調査区南側において数多く検出されたもので、共伴遺物が少量のため、確実とは言えないが、1号ピットを除き、他のものは溝等と同時期のものと思われる。

土壇

溝3より南側の調査区において、すべて検出されたもので、N-5区にあるものが1号、I～K区の南壁際にあり、東寄りの切られている方が2号、切っている方が3号、それにH-3区にあり溝3に切られているものが4号の各土壇である。またH・I区に不明遺構が1基検出されている。これらの遺構からは遺物もほとんど出土せず、性格も不明である。

ピット群

土壇と同じく南側に多く分布するが、周溝を超えた東側や、溝3より北側にも存在する。これらのピットの多くは柱穴かと推定され、事実約10基からは柱痕を検出したが、それによる建物跡等の規模や配列等は現在検討中である。

遺物は、1号ピットから土師器と多量の炭化物が、他のピットからは中世土器、鉄器、埴輪等の小片が出土した。まず第9図-9・10は1号ピット上・中層出土の土師器で、9は有段口縁壺の上部、10は高坏の脚部である。1号ピットの時期は、この土器の年代に比較的近い時期のものと推測される。この他では、38号ピットから陶器の皿（第10図-8）がある。これは白灰色に焼成された上に白色の施釉が行なわれたものである。この他にも、他のピットからも遺物が出土しているが、細片が多く図示しえないものが多い。

その他

以上の他に、周溝内出土の中世土器の中に、溝のものと差異を示す個体が見られたので、それについて記しておきたい。まず第10図-6のかわけは、他のものと違い底部には指頭痕あるいはへら起こし痕を残し、調整はヨコナデかと思われるものである。また第10図-7は、成形は他と同じであるが、底部壁が体部に比べ特に厚くなっている形態のものと思われる。

以上は中世の遺構に所属していたものではないが、両者とも溝出土遺物より年代的に遡る可能性を持つものである。この他、縄文土器数点も出土している。(石川)

c) まとめ

今回の調査によって判明したことについて簡単にまとめてみたい。

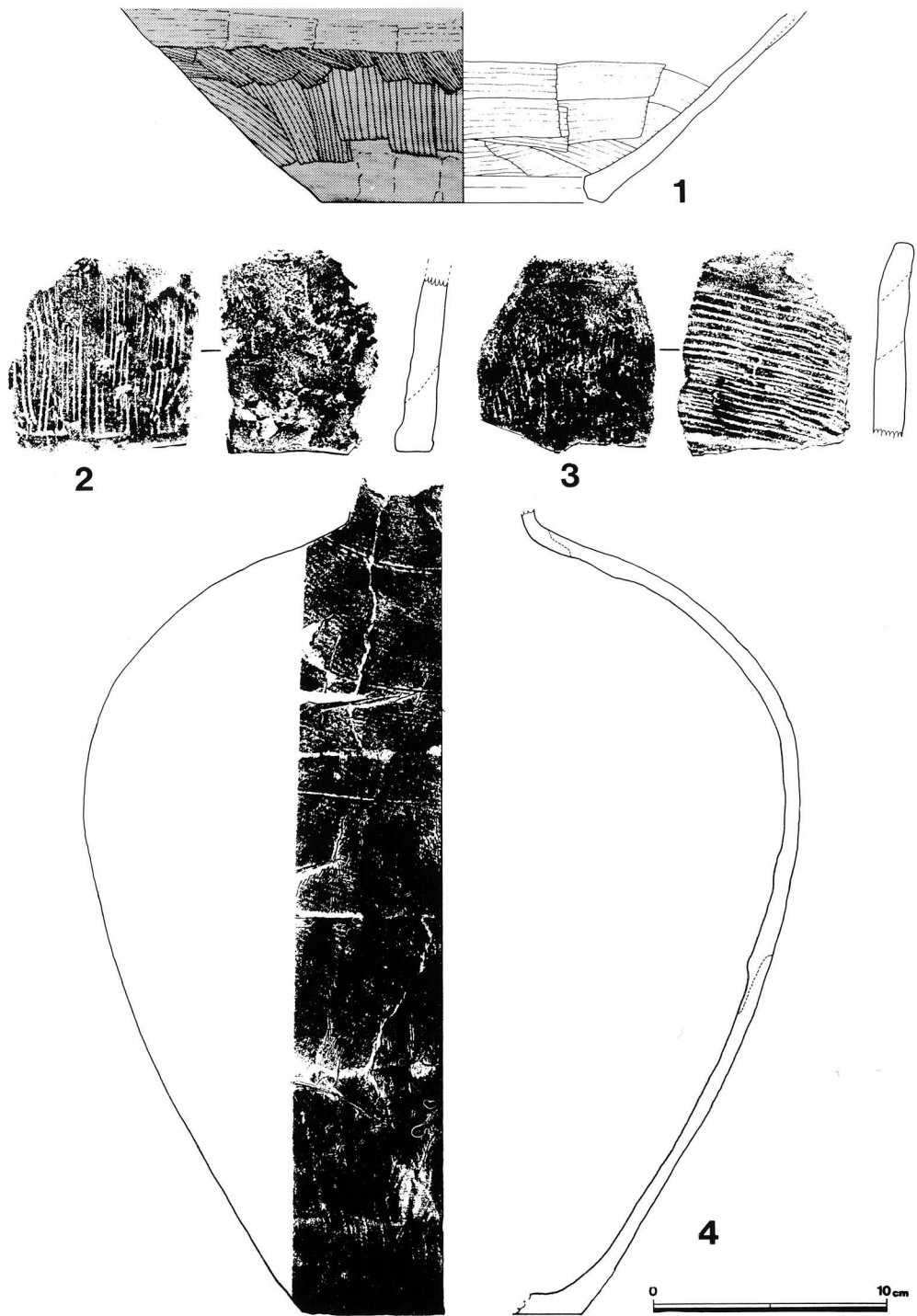
調査範囲もごく限られた狭い地域であり、これをもって多くを語ることは無理がある。時期的には、縄文時代から中・近世にかけての遺物が認められるが、弥生時代に属するものは皆無である。縄文時代に関しては、土器の小破片数点のみの出土であり、本来この自然堤防上にこの時代の遺跡が存在したかどうかは問題があり可能性の薄いものと考えられる。遺跡の帰属年代としては、古墳時代以降と考えるのが妥当であろう。

古墳時代の遺構としては、ピット1、古墳周溝1が検出されている。1号ピットは、ピットとよぶにはやや大きめのものであり、その出土遺物や出土状況からみて土壇とする方がよりふさわしいものかもしれない。時期的には、五領期(古墳時代前期)の比較的新しい時期のものと思われる。これ以外にも、五領期の遺物が何点か本調査区内より出土しており、前述の調査区からも攪乱層中ではあるが明らかに五領期のものと言える甕形土器等が数点検出されている。当市域において、自然堤防上における後期古墳以前の遺跡の存在は明らかにされておらず、当該地域に古墳時代前期に既に集落跡等の遺跡の存在が予想されたことは注目されるものと言えよう。確認された古墳の周溝は、全体からみればごくわずかな部分であり、その全様を把握することはできない。確認部分から復原すると、内径で25m前後、周溝を含めると35m前後の円丘を主丘とする古墳と考えられる。すなわち、円墳以外のものであれば、全長50~60mの前方後円墳であった可能性も考えられる訳である。時期的には、現在出土遺物の整理途上にあり断定的な事は言えないが、古墳時代中期のおわりごろすなわち5世紀末葉を前後する時期のものと考えられる。これは、宍塚地区における台地上の古墳群も含めて現在最古に位置づけられるものであり、台地上の古墳群に先行して自然堤防上により古い古墳が発見されたことは興味深い事実と言えよう。

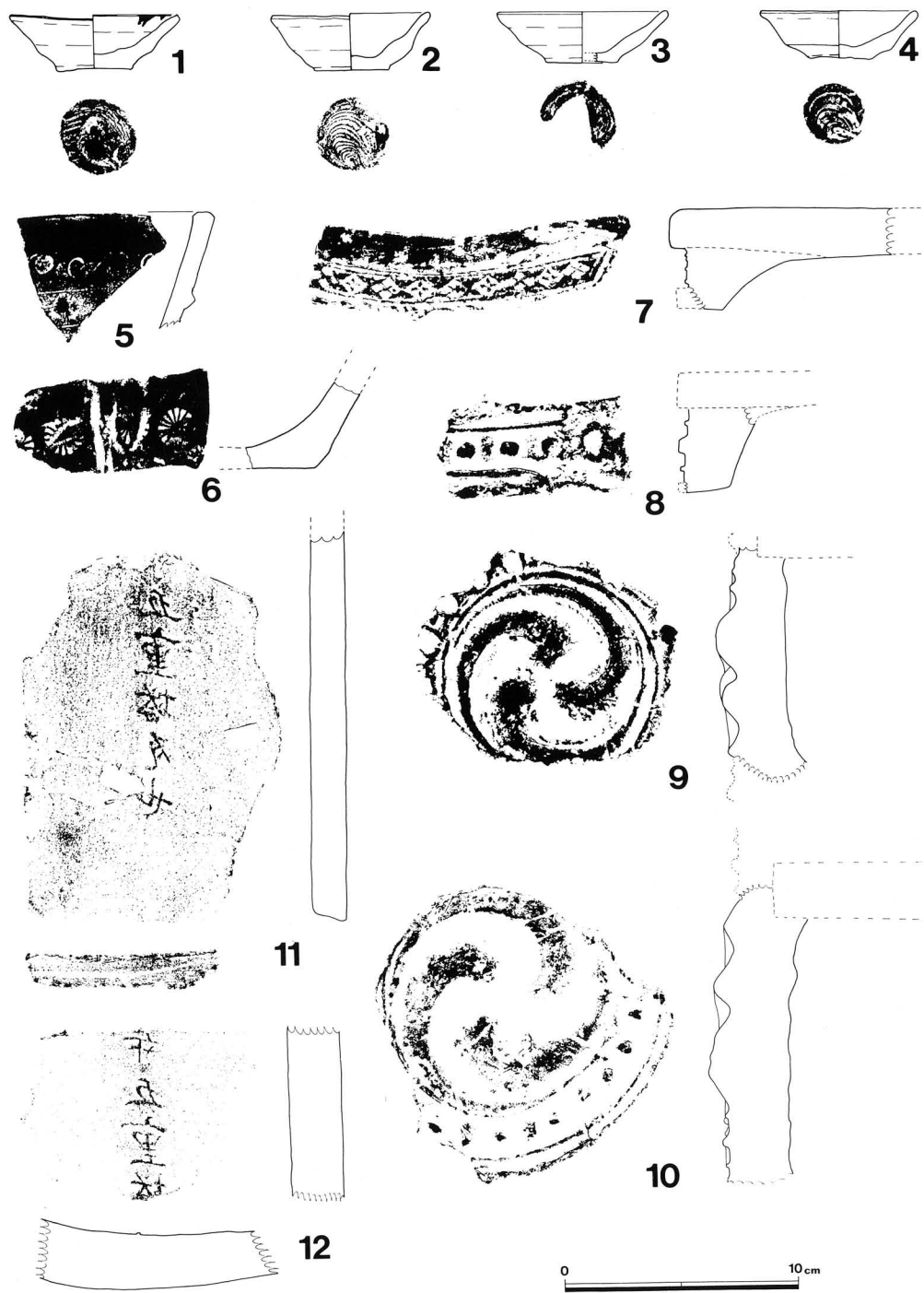
奈良・平安時代の遺構は検出されなかったが、中世あるいはそれ以降のものとして、3条の溝状遺構と土壇、ピット群が検出されている。この中で、時期及び性格の不明な土壇を除く溝、ピット群に関しては、何らかのかたちで旧般若寺に関連する遺構群と考えられる。現在その詳細な年代観について明らかにすることはできないが、本調査区内からも前述の調査区と同様中世の古瓦が出土しており、現般若寺所有の銅鐘には近い年代が想定される。今回の調査において、旧般若寺の堂塔等の主要な建物に関する遺構を確認することはできなかった。しかし、周辺に散在する多量の古瓦や今回検出された「寺五重塔瓦也」の文字瓦等の存在から、本寺院址が本来基壇、

礎石等を有した寺院址であったことは确实視され、寺域確定を含めこれら堂塔址の確認が今後の課題となろう。

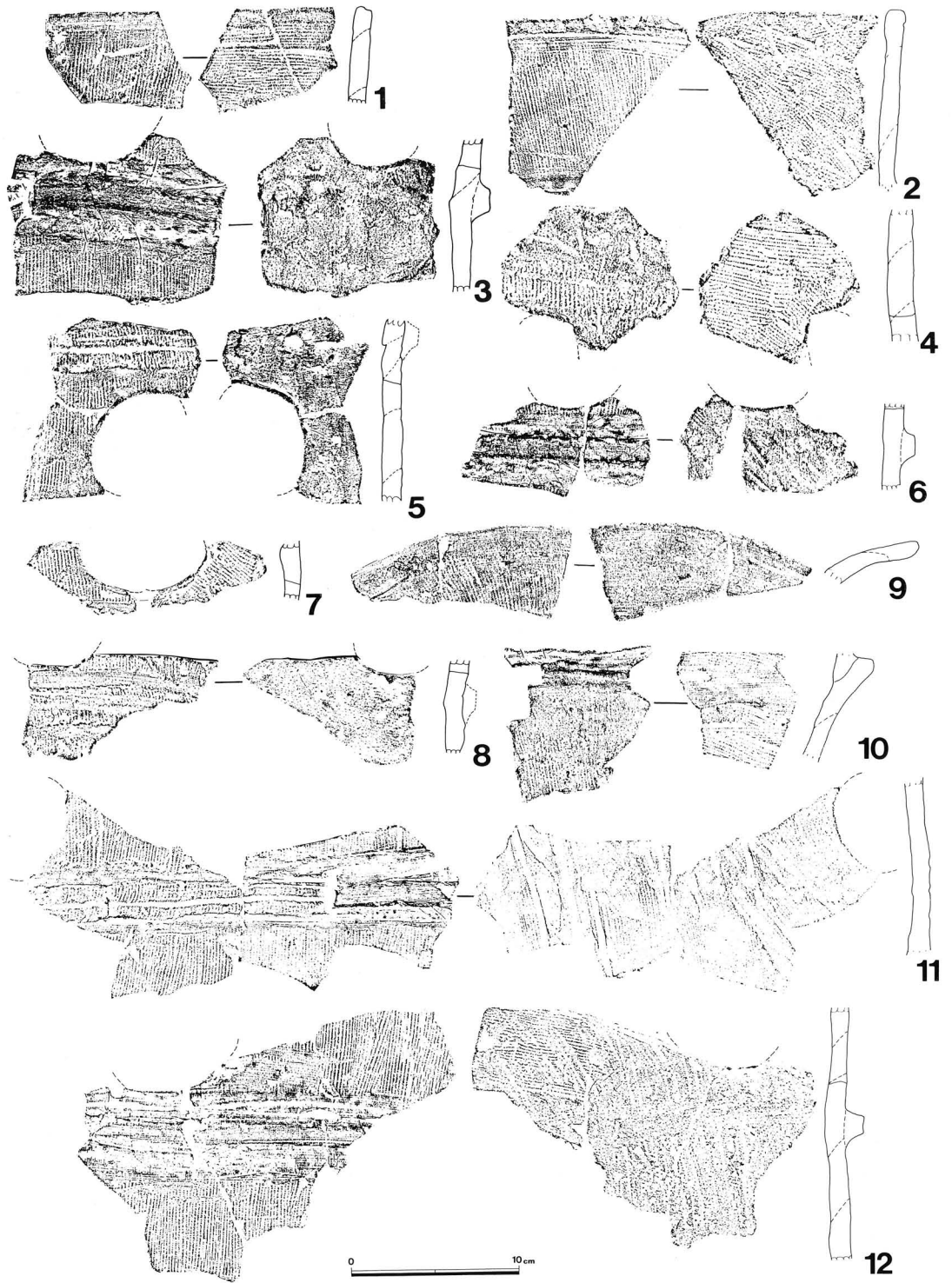
(塩谷)



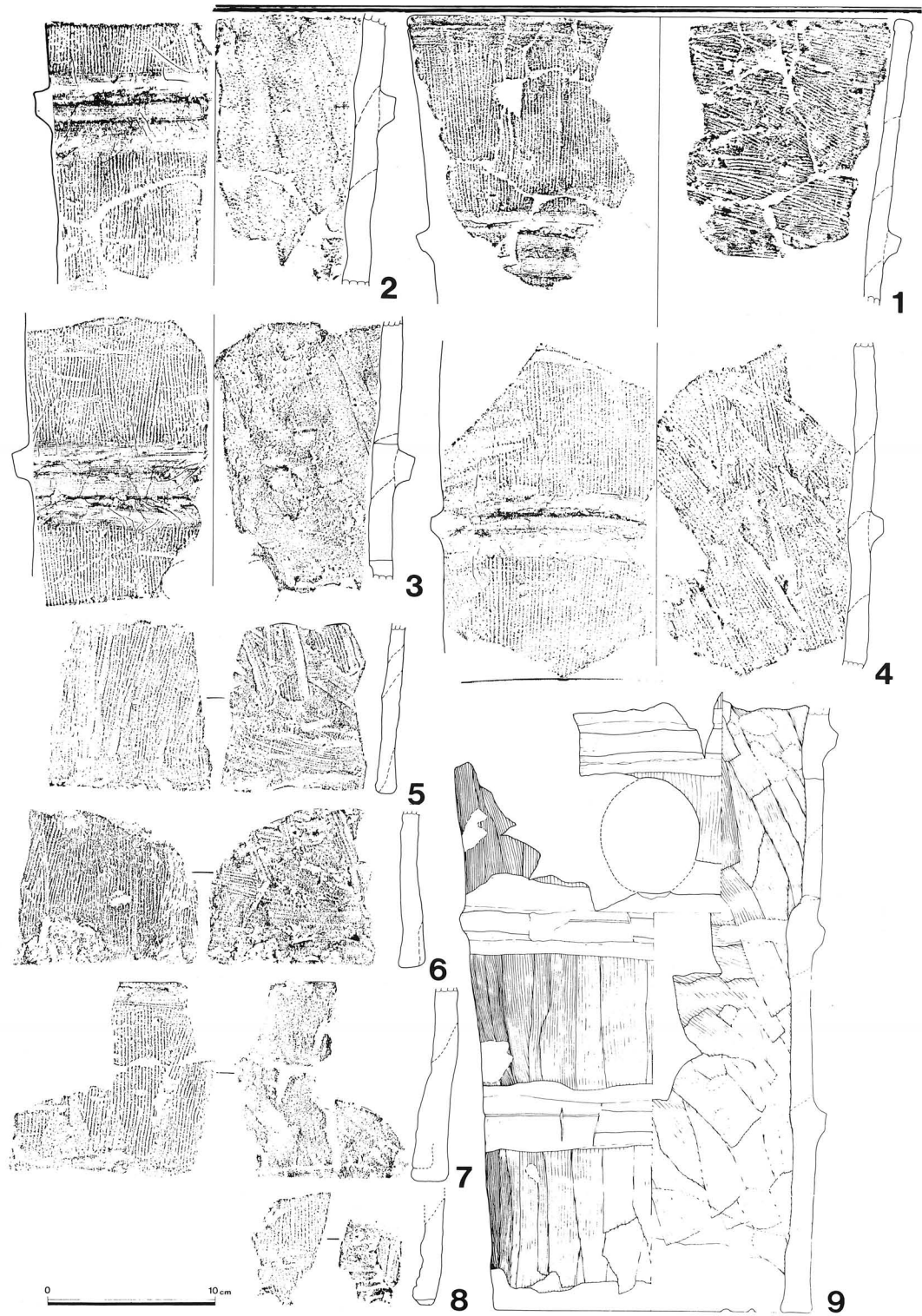
第5図 竜王山古墳（1～3）、西屋敷地内出土遺物



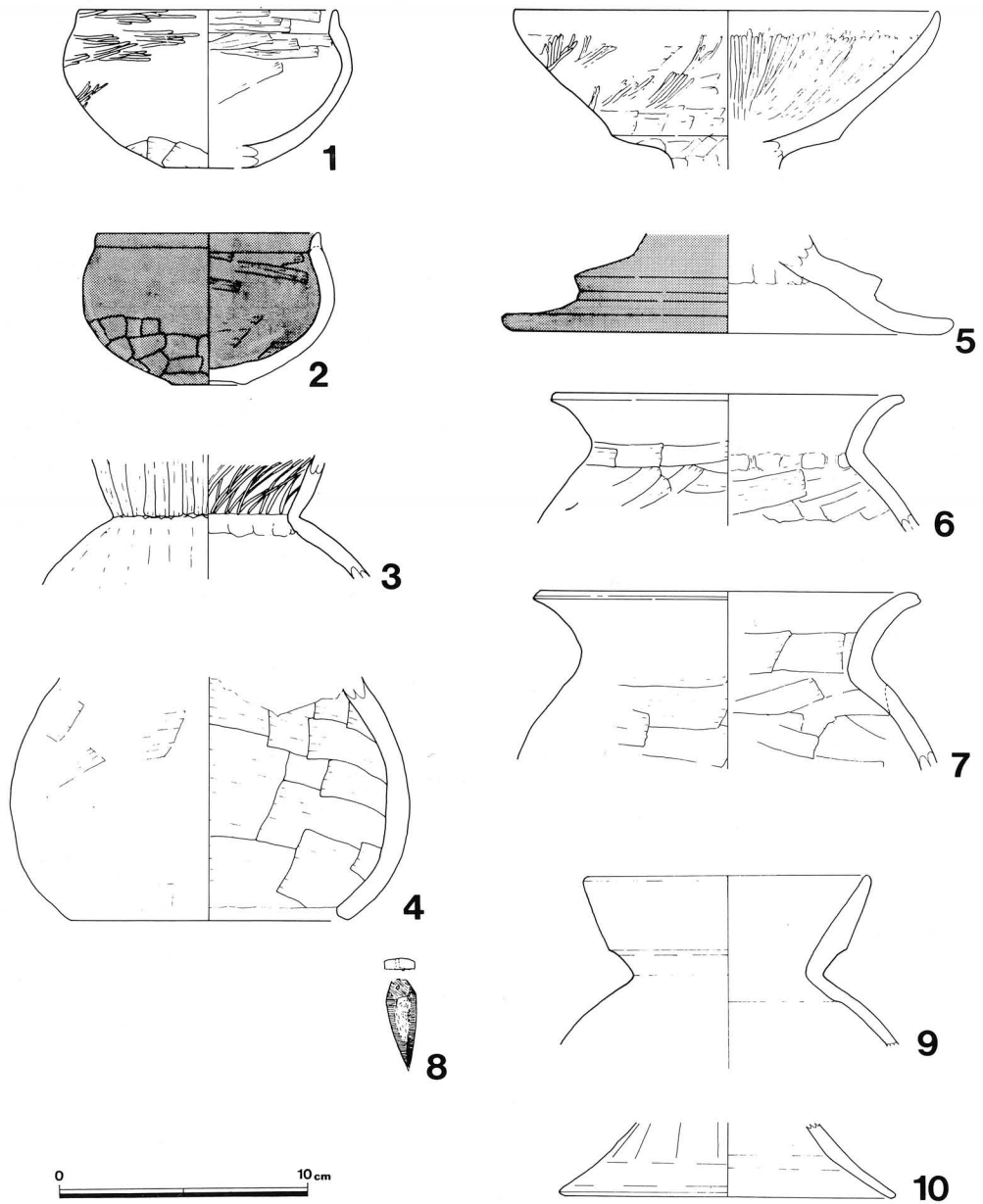
第6図 西屋敷地内出土遺物



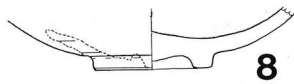
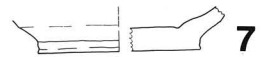
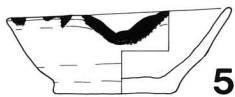
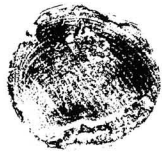
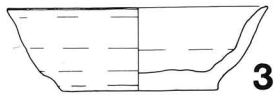
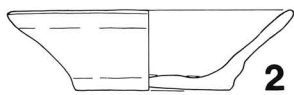
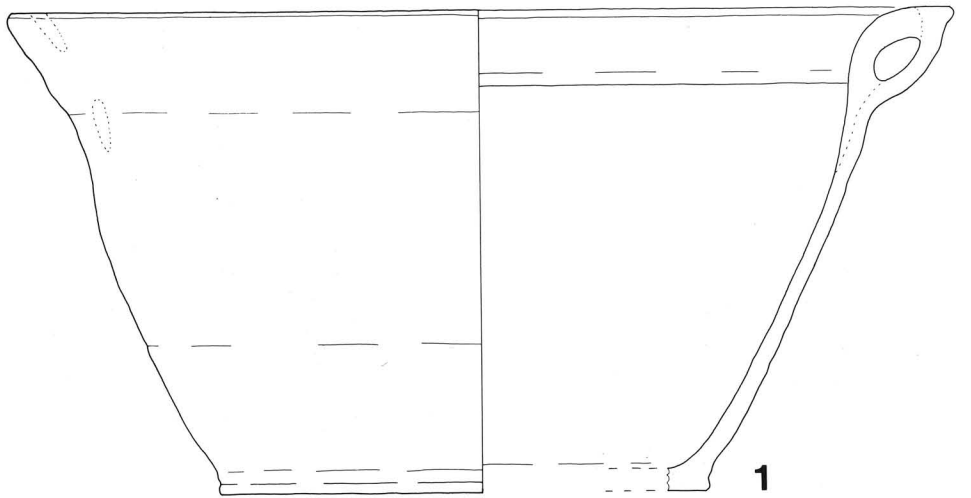
第 7 図 穴塚小学校地内出土遺物



第8図 実塚小学校地内出土遺物



第9图 宋塚小学校地内出土遺物



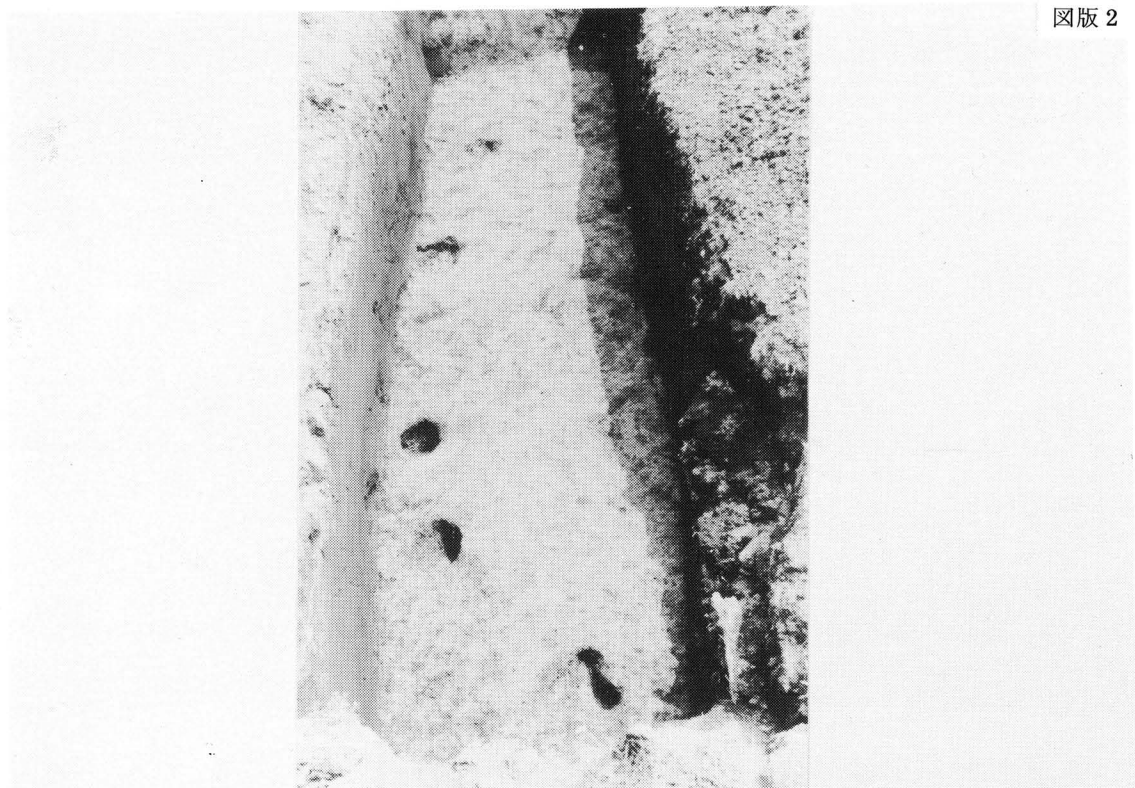
第10図 宋塚小学校地内出土遺物



(1) 般若寺（西屋敷地内）調査前全景（東側より）



(2) 第3トレンチ1号土壇土器出土状況



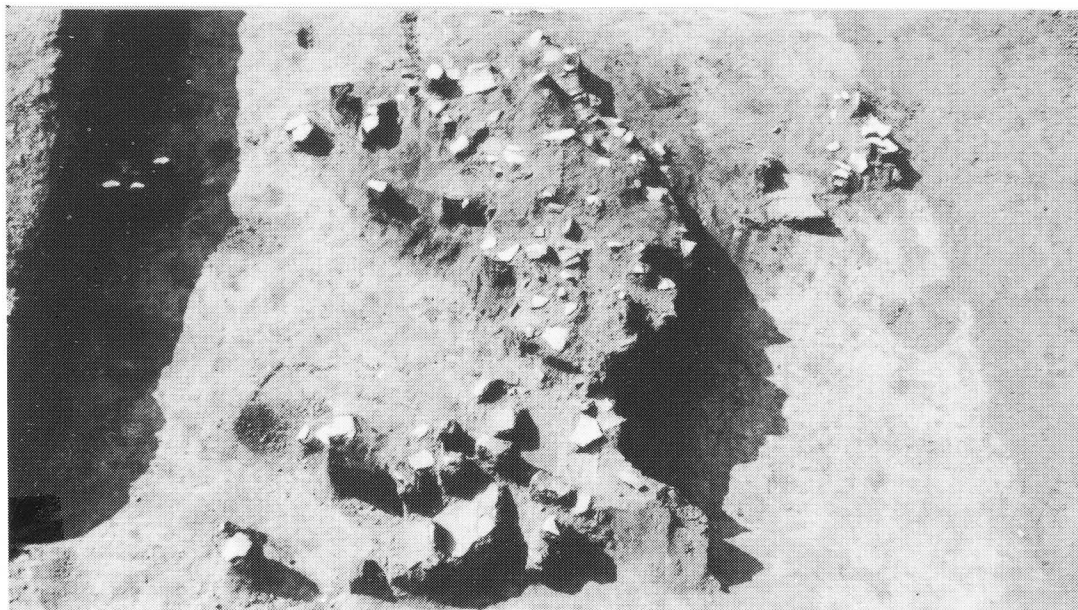
(3) 第5トレンチ周溝及びビット群 (西側より)



(4) 第5トレンチ周溝コーナー (南側より)



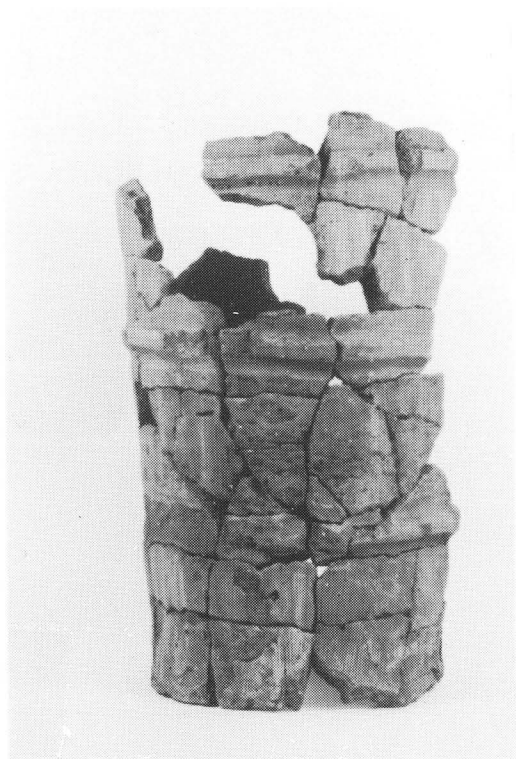
(5) 般若寺 (宍塚小学校地内) 遺構全景



(6) 周溝内埴輪出土状況 (東側より)



(7) 溝2断面



(8) 出土遺物 (第8図-9)



(9) 出土遺物 (第6図-8・10)

調査会組織

会 長	永 山 正	市文化財保護審議会委員長	調査員、調査補助員及び協力員	飯田司郎（市郷土資料館）三木弘 （国学院大学大学院）石川功、米川仁一、斉田克史、中沢達也、井坂洋子（国学院大学）、伊藤高史
副 会 長	日下部 晁	市 教 育 長		菊地昌宏、斉藤ゆかり、（茨城大学）
理 事	茂 木 雅 博	市文化財保護審議会委員		
〃	伊 藤 幸 雄	市都市計画部次長	調査参加者	雨貝要、佐野歌子、佐野栄、佐野三郎、佐野しげ、佐野力、佐野輝雄、佐野敏雄、佐野富雄、佐野守男、嶋田辰雄、堤光男、沼尻福次郎、宮沢さと子、宮沢真紀、宮本常之
〃	田 中 昭	市 開 発 部 次 長		
〃	神 野 幸 一	市 建 築 指 導 課 長		
〃	神 林 栄 久	市 耕 地 課 長		
監 事	飯 島 秀 夫	市 教 育 次 長		
〃	滝ヶ崎 洋之	市 企 画 課 長	整理参加者	石川功、斉田克史、武蔵美和（筑波大学）、井坂洋子、須貝和子、千田真由美、浜田久美子、松下澄子
幹 事	佐 野 賢 治	市 社 会 教 育 課 長	事 務 局	佐野賢治、岩沢茂、日下部和宏、広瀬智克、石山淳一、宮本孝子、飯田真巳、塩谷修、中村光一（市教育委員会社会教育課）
	岩 沢 茂	市社会教育課文化係長		
	石 山 淳 一	市社会教育課主幹		
	塩 谷 修	市社会教育課主事		
調査担当者	塩 谷 修			

般若寺遺跡跡（西屋敷地内）・竜王山古墳
般若寺跡遺跡（穴塚小学校地内） 発掘調査概報

発行日 1987年3月31日

編集 土浦市遺跡調査会

発行 土浦市教育委員会

〒300 茨城県土浦市下高津2-7-36

TEL0298(22)2613

印刷 菊池印刷株式会社